

弘井正プロジェクト『第6回 詩の朗読と音の照明』が1月29日曜日、弘井さんの勤務先「細木ユニティ病院6階 多目的ホール」でおこなわれた。

今回のテキストは、精神科訪問看護師である西川宏さんの詩集『消し忘れた声』(るすいるす義美)。



朗読は松浦満さん。音楽はギターが曽根宏一郎さん、ドラム・ジャンベ・パーカッション・ピアノが前田力丸さん、ベース・バイオリンが弘井正さん、という細木ユニティ病院最強メンバー。

弘井さんの作成したパンフレットから。

『観ると観られるの関係ではなく、一人一人の自発的な気づきが新しい地平を見せてくれるような舞台になっている。それが訪問の場にあるのでは…と。とても高貴に考える訪問看護の不思議な力。『世界』に僕ははかかわっている。『世界』は僕らである。その関係性は誰もが、変化のきっかけを見つけることができる。細木ユニティ病院のスタッフで構成されたバンドが音を作ります。精神科訪問看護、気持ちはロックかな!』

(ダイケ註・西川さんの勤務先は別な病院です)

昨年9月、光よりも速いニュートリノの存在を観測した、というニュースがあった。そのことはアインシュタインの相対性理論を無効にする観測だった。(さらなる検証が必要だが)

1月15日、今度はミクロの世界を説明する量子力学の世界で、1927年にハイゼンベルクが提唱した物理学の基本法則「不確定原理」に欠点があり、成立しないことがあることを、小沢正直名古屋大教授らのチームが見つけた、というニュースが飛び込んできた。

ここ3ヶ月余りで、マクロとミクロの基本法則が新しく書きかえられることになった。生きてみると、こんな発見に立ちあえるのかと、少々うれしくなった。この世の中、なにごとくも「絶対」「不変」ということはなく、常に物事は書き換えられていくのだ、とうれしくなった。言い換えれば「普遍」は変化していくものである、ということになる。

さむい冬になった。さむさの苦手なぼくは冬眠でもしたい心境だが、人間には冬眠をする能力が備わっていない。だから、無駄な身体性を費やして冬をやりすこすしかない。

前号のこの欄で、「節電の冬だ、と煽って電力会社はふたたび原子力発電が必要だ」という世間の声がよみがえってくるのを待つ作戦なのか、それともほんとうに電力が足りないのか、ぼ

くにはわからないことだが、国や電力会社が「節電・節電」と言えば言うほど、ばかばかしい冬がやってくるのだなあ、とついおもってしまふ」と書いた。『冬』にはなんの恨みもない。ばかばかしい冬、とは勢いで書いただけのことではある。

その冬、節電の冬になっているのかどうか、よそのことはわからないが、四国電力については、今朝の高知新聞(1月13日付)に「伊方原発きょう全面停止」「四国の電力不足せず」と大きな見出しが一面に載った。伊方原発で定期検査のため全3基の原発が停止したそう。伊方原発とは四国唯一の原発で、四国の電気はこの原発で40%が賄われてきた、といわれていた。その40%が停止しても四国の電力は何とかなるらしい。

原発が設置されたおかげで設備の余力、つまり、電力余り、をうんでいたことと、発電設備を持っているところから購入すればなんとか賄っていけるということだ。おまけにその購入金額は四国電力が自社で生産する電気よりも安いものもあるそう。ここらへんのキャラクターは素人には見えにくいところである。それでも囲み記事でこうあった。『数字上は火力、水力でまかなえる。ただし、定期検査による休止や水力発電所の水量不足などが起されれば、発電量は目減りする。夏場は一定の節電が必要かもしれない』

ではこの夏はふたたび、節電(経済活動を縮小する)なのか、原発に頼る(経済を失墜させないのか)世論が息を吹き返すのか、どうなるのだろうか。でも、今のところ、脱原発、は多数の意見のようだ。ほんとうは、原発に頼って経済を活発にし、豊かな生活を送りたいと内心ではおもっている人がいたとしても、

いま、そんなことは口にできない、と原発反対と口先だけで言っている人もいるだろうが、そういう日和見な人もくわえて原発はなかなか再稼働できないだろう。

再稼働できないとしても、原発の後始末をどうするのか、ながい課題が日本人には突きつけられている。

この3月、東北地方を襲った津波で日本人は原発の現実を突きつけられた。すぐさま反応して、自分は原発には反対だった、というにわか反原発の人がおおぜい声をあげた。最初はうんざりしたが、そのうち、にわかでもなんでもいい、あげた声がかつ込められなくなつて、それらの声が、30%減の文明に後退する契機になれば、とおもったがどうやら、文明はこのままを維持して原発だけにノーを突きつけているような雰囲気だ。

津波ではおおぜいの人が亡くなった。自然の力を甘く見ていた、とは言いきれない災害だった。高知にも必ず同規模の災害が襲ってくると言われている。県をあげて周知運動をしているかといつて、ぼくはなんにも対策らしい対策をしていない。住んでいる家は古い借家だから、たぶん崩壊するだろう。運悪く下敷きになるかもしれない。また高知市は地盤が2メートルも沈下するらしいから、近くを流れている鏡川が決壊したら溺れて死ぬかもしれない。まだ死にたくないとおもっているが、なんとなく安穏と暮らしている。いつ来るかわからない災害にビクビクしていると、不意の交通事故で死ぬかもしれない、なん

ておもつたりしている。人は死をまぬがれない存在であるなら、いずれ死はむこうの

方からやってくるのだし、それが自然災害なのか、交通事故か、あるいは進行性のガンの発覚によってなのか、あつというまに人は死に直面させられることがある。

それでも、その時はその時なりになんとか死をまぬがれる手段をとろうとするだろう、きつと。慌てふためくかもしれないし、みよように静的な心境に取り込まれて、死を怖がらないかもしれない。まあ、どっちでもいいだろう。死が本質的に避けられないものなら、臨床的に対処するしかない。

とまあ、それは死んでいく人の場合だが、残された人の喪失感は何れほどのものだろう。愛する人がみんな死んでしまつて、自分だけ生き残るといふ不幸なこともあるだろう。先の3・11ではそのような現実を突きつけられた人もいた。死は人の思惑などなんともおもっていない。

人は死ぬためにこの世界を生きている。この世界は自分が選んだものでもなく、つくりあげたものでもないのに。ただ、この世界に否応なく投げ込まれてしまつて存在である（ハイデガーは「被投性」といった）だけなのに。

人は否応なくこの世界を生きなればならない。私はどうしてここに存在しているのか、生きていることに意味があるのか、そんな不安を抱えて人は生きている。そのうち人は、否応なく存在させられているこの世界ではあつても、いつか強制的に排除される日が来ることを知る。人は自らの死を強く意識するときがくる（ハイデガーは「先駆的覚悟性」といった）。

化を楽しんで生きている人もいれば、困惑しながら生きている人もいるだろう。

外村京子さんはご主人の仕事の関係で9・11時のロサンゼルスで暮らしていた。その外村さんの詩集『しまいこんだ岸辺』(本多企画)の中から「しまいこんだ岸辺」全篇。

暮れはじめた湾岸線を走りながら
べつの時間のことを おもふ
ようやく人々の動き出す
裏側の(あるいは表側の) 日曜の朝
始まるはずだったいちにちを
わたしはいつ 落としたのだろう
思い出せない

あちらの場所とこちらの場所を
行き来するうちに
わたしから抜け落ちた
あなたという呼称は
いつのまにか
別の名になつている

朝陽が夕陽といれかわつたように
山羊のチイズやヌイサンジョルジュは
まだすこし残つていた
(キッチン窓は磨き忘れたが)

そのとき人はどういう態度をとるのか。どうせ死ぬから、とのんびんだらりと世間を渡るのか、自分の生の意味をもう一度考えなおして、生と死の意味を再構築するのか(ハイデガーは「投企」といった)。人それぞれだろう。ほくは、どちらでもいいとおもふ。これはほくの性格だろうが、死と向き合つて生きていく、とか、生と向き合つて生きていくとか、そんなシンククな生き方はできそうもない。

あるいは、この世界を積極的に選びとろうと試みたとき、ふと、心をかき乱すことがある。この世界の現実よりも大事な現実が心の中にあるのではないか、と。私の心は世間の現実にもさる現実を抱えているだろうか、と(フロイトは「心的現実」といった)。フロイトに言わせれば、人間は自らが楽をする世界観をつくりたがり、現実を操れるという錯覚を抱いて滅びてしまふ危険性があったのに、それを克服して生き延びてきた生物であるという。なんとこの健全な存在なのだろう人間は。だから他の生物を駆逐してこの惑星を占領しているのだろうか。そんな人間にむかつてフロイトは、西洋に君臨してきた「神」を葬り去り、「無意識」をキーワードに不完全な自らの思考と言葉で生に立ち向かつていくことを提唱した。

この「無意識」は「神」のいない日本人にも適用可能のようだ。「無意識」は文化の枠を越えているのだろうか。

文化の枠を越えて生きていく、という経験はほくにはないのだが、現代では世界中に日本人が暮らしている。その土地の文

靴から手帳を出し
明日の保護者会の顔を
窓に映して
その後 行くつもり
ちがう場所をめくり
もつ
夜の位置にわたしはいて
ときどき
いつしよくに放り込まれた
キボウやゼツボウも広げて
干そうと思ふのだが
しまいこんだ岸辺には
陽の差す時間がない

否応なくこの世界に投げ込まれてしまつているからこの世界は生きにくいのか、それとも、もし積極的に選択した世界であつても生きにくいのか、ほくにはわからないことだが、なんとなくこの世間は生きにくい。生きている不安や意味を積極的に探し求めていないとしても、やはり、なんとなくこの世間は生きにくい。

そんな世間のなか、おまけに外村さんはアメリカという文化の違う国にいて、それも、アメリカというアイデンティティがもつとも昂揚した9・11に身を置いていた。

日本という岸辺とアメリカという岸辺。両岸辺を往き来する

うちに外村さんの内部で、アメリカのみならず、日本という国の姿がよく見えなくなりはじめている。それはたぶん、私」という領分に「公」が姿を見せたり姿を隠したりして侵入してくるからだとおもうが、日本にいる時よりもその「公」に対して大仰な身振りを要求され、その要求に的確に応えようもないが、その「応えようもない」という気持ちで外村さんをアメリカという国から引き離そうとしているようだ。そういう自分の感情に誠実であろうとすればするほど、解きほぐせない倫理観や論理観にとりかこまれてしまう。たぶん外村さんはそういう生き方しかできない人なのだろう。

現地の小学校に通う娘が毎朝、星条旗に向かって「合衆国に忠誠」を誓わされていることや、兵士の帰還を祈るリボンをしている娘の友人から、日本人はお金さえ出せばいいとおもわれている、という現実が娘とおして伝わり、外村さんはこの国での「足場」を不確かなものにされていく。

わたしから抜け落ちた日本はいつのまにか別の名になっている、と認識する外村さんは日本という岸辺も、アメリカという岸辺もしまいこんでしまうしかなかったのだろう、きつと。

いま、外村さんは日本に住んでいるのだが、このアメリカで経験した「生きにくさ」は、たぶん、日本で暮らしているいまでもそう変わりはないだろう。なにしろ、人は、この世界に否応なく投げ込まれている存在であり、生きていることの意味を探しあぐねているのだから。誠実であろうとする外村さんに「生きやすい世間」などあるはずもない。

窓は 家の外部と内部を視線でつなぐものであつて 身体を交流させるためのものではなかつたのである 触れることをあきらめた場所から 言葉がかけられる そんな言葉は存外やかましいものだ

すべてを見せて 隠すものを持たないこと この都市にあつては 見ることは 家の中から外へ出かけることであり 見られることは 相手の中へ受け入れることであつた

そんな家々の窓の外には 少し悲しそうな足だけが残つていたり 怒つたような表情の顔だけがぶらりと浮かんでいたりするのである

「窓は戸口でないために身体が家にはいることは許されていなかった」と、身体は入口からしか入れないという世間の掟がまず示され、窓とは「見るもののために存在していて、見えるもののために存在しているのではない」という窓の効用が語られ、ぼくたちが生きているこの世間は、見ることは家の中から外へ出かけることであり、見られることは相手の中へ受け入れることである、という規則に縛られていて、一見、規則とは窮屈なように見えるが、世間全体を考えたら受け入れなければならぬものであり、受け入れてその規則性の上に暮らしているという世間もまんざらではないとおもえるようになってくるのではないだろうか。

時々ほみ出し者が出てくるが、そのほみ出し者ですら、「少

瀬崎祐さんの詩集『窓都市、水の在りか』（思潮社）を読んでいると、身体と心を分離することで生きにくい世間もそれなりに渡つていけるのかもしいれないという思いにさせられた。同集から「窓都市」全篇。

この都市の家には戸口がない その代わりに家にはいたるところに窓がとりつけられていた さまざまな大きさの窓がならば家が散在しているのだった
どんなに大きな窓であつても 窓は戸口ではないために身体が家にはいることは許されていなかった だから
この都市では 人々は 自らの肉体を家の外へ残し 魂だけを家の中へ入れるのだった

家の内部には 決められた役割をになつた部屋が配置されている たえば 手紙を受けとる部屋や 詩を朗読する部屋 決闘をおこなう部屋などであり 不思議なことに身体がなければ意味を持たないような部屋までもが 配置されているのだった
家の内部には部屋をつなぐ通路があり 運搬車のようなものが動いている 手足を持たない魂はそれに乗つて移動するのだった ときおり すれちがう魂が親密な挨拶をしている光景を見ることができ

このように 窓は見るもののために存在しているのであり 見えるもののために存在しているのではなかつた

し悲しそうな足だけが残つていたり」「怒つたような表情の顔だけがぶらりと浮かんでいたり」して、窓にその存在を許されているのだ。ぼくたちは否応なくこの世界に生かされている。

世間は寛容である。小さな異物をも屁とも思わずその懐に受け入れて、身体と心をそれぞれの生きにくさを「分離」することで「生きにくさ」のアクをやわらげようとしているようにおもえるのだが。「公」である窓は「私」である身体や心を制限しつつも、それぞれの在り方を提言しているようにおもえる。

この世間は生きにくいとか、自分の意思に関係なく生かされているのだとか、この現実よりも大事な心の現実があるのだとか、生きている側にはいろいろ言い分もあるだろうが、いずれ「死」がやってくる。その「死」は他者のものであり、死者に「死」はない。「死」はなにからなまでに他者のものである。

北畑光男さんの詩集『北の蜻蛉』（花神社）から「北の蜻蛉」全篇。螢や蜻蛉は死者の魂を宿している、という言い伝えがあり、この詩には死者との融合がある。

廃線になったレールに

夏があつまり

北国はどうめいなひかり

死者の魂の

蜻蛉たちはレールに止まるや一瞬

大きな目でみわたし

安心しきつたように翅を休めています

多くの乗ったとろっこは
そこに向かって走っていきます

前方には
あの世から飛んできた魂が
一列に並び
尾や翅を下げています

飛びたて
飛べ
そんな願いも届かず
魂たちは

ぼくの
とろっこに潰されていきます
ぼくがとろっこに乗ったばかりに
背を割り

生まれ出た
あの世からの
魂をも
轢いてしまったのです
みあげれば

くるみの木や白樺の木たちは
真っ青になってふるえています
ぼくは
死者の魂を

夏のひかりを
轢き潰してきたのです
ひきかえすとまたおなじことになる

戻るに戻れない
廃線になったレールには
多くの魂がはりついたまま

夏があつまり
今日も
北国はどうめいなひかりです

『他者の死』でしかない『死』は他者によって慈しまれ、愛しまれることで、『他者の死』という孤独を癒され、『死者の死』という幸運を得ることができる。

みじかい北国の夏、生まれたばかりの蜻蛉を心遣いで轢いてしまった北畑さんはおなじ過ちを繰り返すことをためらってそこに立ちつくすことで、『どうめいなひかり』である魂の心を全身で感じている。

北国の一瞬の夏という背景のなか、一年中の光を集めて光る魂と共に立ちつくしている北畑さんの姿が透明なりしんずんで描かれているこの一篇、ぼくにしてみればめずらしく立ちどまってしまった。余分なものを背負わない言葉が目の中に立ちあがってきた。

人が否応なくこの世界に投げ出されるとしたら、動物はどうだろう。動物もまた否応なくこの世界を生かされているのだろうか。それとも、人のように葛藤をすることもなく、ただ、漫然と生きているのだろうか。

いや、そうではないだろう。動物もそれなりにこの世界の不

思議について考えているだろう。動物園に繋がれた動物は遠い故郷や生き別れた仲間のことをおもいながら、この世間の無常さをたつぷりと身に沁みさせているにちがいない。

それを遠くから見ている「私」もいつか動物園の動物になるかもしれない。「ホモサピエンス」と書かれた檻の中で濁る水を見つめながら観客に背を向けつつけて、この世間の無常さをたつぷりと思いつらされることだろう、きっと。

横田英子さんの詩集『川の構図』（土曜美術社出版販売）のなかの「河馬の背中」という詩はそんな、河馬も人間もこの世間のエアポケットにはまりこんだ悲しさにみちあふれている詩だ。

——私はいつ河馬になれるだろう——

通天閣の展望台から見えていた
得体の知れない 奇妙な
うごめく物体は
いま背を見せる

檻の向こうに
そそり立つ通天閣
光がきらめく その先と
私の目の位置
黒い物体の正体に
ようやく気づいた

檻の中でも

春が溢れて河馬の足元に流れる
時間が揺れている
尻尾の先まで伝わって
空をも抱えて

河馬は
うつむいて うつむいて
濁る水を見ている

止められない時の流れの中で
私は 河馬と向き合っている

ただっ広い背 のんびりした顔
無防備な構えの下で
獣の本能も

水と戯れる足裏に
眼の中に
たたえて

通天閣の上で見えていた
あの背中
あの背中の茫洋とした
うねりの哀しさが見えてくる

花潜幸さんの詩集『薔薇の記憶』（土曜美術社出版販売）の世界は、この世の現実よりも大事な現実が心のなかにあることを際

だたせている連作だ。集中から「薔薇の記憶」全篇。

風はまだ夏の匂いを残していた。父が窓を少し開けると花虻が入って来て母の胸の上で上下に浮揚する。「みておきなさい。」と母が私に言う。父のためらう顔を抑え、浴衣を開いて、私に血染めの包帯を見せた。「いたい。」と返す私の言葉のすぐ下で、母は行き先のわからない自分の身体の痕跡を私の記憶の奥に隠した。父は母の手を取って浴衣をすぐに元へ戻す。

父に背を押され、私は病院の中庭に出た。そこには深紅の薔薇の花が点々と咲いており、蜜蜂やセセリ蝶、黄金虫など様々な虫が、花の香りに浸りながら飛び回っていた。緑色の蜘蛛が葉影に巣を張っていたが、まだ虫の勢いが強すぎて獲物はわずかだった。空は晴れ晴れと広く、わずかに耳たぶのような雲が浮いている。私は植え込みの迷路を両腕を拡げて飛行機になって走り、無花果の樹に抱きつくと、巨人になってゆさゆさと枝を揺らした。私の力で空まで揺れているように思え、手に着けた泥で、記念の手形を庭石に幾つも残した。

一月後、母は去った。家や庭や路地の奥に重ねられた、如雨露やバケツ、縁側に父が作った物干し台、朝に匂いを付けた茗荷の葉っぱ。そうしたものの全てから、母は去って行った。やがて新しい母が来て、古い写真や着物が仕舞われていくにつれ、小さな夜の夢からも、小さな昼の遊びの記憶からも、母はそっと立ち去り、その場所を譲った。

母は私が、やがて全てを忘れることを知っていたし、そう望んでもいた。だが、いつか私が母への道筋を辿りたくなったとき、手掛かりとなる色だけを、記憶の奥に隠したのだろう。庭に四季咲きの紅い薔薇が咲いている。

死は抗いがたい存在である。この世界に投げ込まれているだけの存在であっても、死だけは確実にやってくる。その死の痕跡は母の胸の血染めの包帯である。そして息子は母が死んだ後も背後に父の不実が隠されている血染めの包帯を原罪として生きていかなければならない。

目に見える物質でしかないこの世の現実はいずれ消滅するが、網膜に記憶された朱や海馬に蓄積された母の声は無意識の内部に潜行し、否応なく生かされているこの世界での、不意の選択の要請時に、死と生の意味の再構築を要請された汀ではじめて、自らの思考と言葉で心のなかの現実を再構成し、生きる力となければならない。そのことの覚悟がここに書かれている。